

「私をだれと言うのか」

マルコによる福音書 15章 1 - 15節

森島 牧人 牧師

教会の暦からは少し遅れていますが、続けてマルコ福音書を読んで行きたいと思います。

今日の聖書には「ピラトから尋問される」という小見出しが付いていて、「夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、・・・イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。」(マルコ 15 : 1) と始まっています。つまり、ローマの支配下にあったイスラエルでは、裁判はローマの法律とユダヤの律法という二重の法の下で行われていました。主イエスを十字架の刑で殺そうと考えていたユダヤの指導者たちは、律法では認められていないため、どうしても主イエスをローマ法で裁く必要があったのです。

しかし、聖書がこの記事を記している真意は、主イエスの十字架刑が人間の総体による裁判であったということ、つまり主イエスを殺したのは、ピラトや彼の周りのローマ人だけではなく、その罪はすべての人間にあるということをはっきりと示す中で、この裁判を進んで行くことになるのです。

さて、大祭司の「お前はほむべき方の子、メシアなのか」(14 : 61) との問いに、主イエスが「そうです」(14 : 62) と答えたことで、最高法院の面々は主イエスを弁護人もないままに神を冒瀆する宗教的な犯罪者として断じ、さらにユダヤの王・メシアを詐称し民衆を扇動したローマ皇帝への反逆者として主イエスを総督ピラトのもとに引き渡します。

しかし聖書は、「ピラトがイエスに、『お前がユダヤ人の王なのか』と尋問すると、イエスは「それは、あなたが言っていることです」と答えられた。」(15 : 2) と記しています。ユダヤの王と詐称したとされる主イエスのその時のお姿は、まさに「彼はくるしめられるれどもみづから謙りて口をひらかず、屠場にひかる小羊の如く毛をきる者のまへにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき」(53 : 7) とのイザヤの預言そのものでした。そこでピラトは、このみずぼらしい男を軽蔑しながらも、この男が彼らの言うような反逆者には見えないこと、ユダヤの王の詐称くらいでは裁判をするにも値しないこと、さらにユダヤの支配者たちにはこの男への妬みが見えることなどから、何とかこの男を助けられないものかと考えます。しかし、後に責任を問われることのないように、この男のローマの主権に対する立場を確かめるため、慎重に尋問します。しかし彼は最終的には、自分の総督としての立場を優先させた形で群衆の要求に屈し、主イエスは「ユダヤ人の王」と書かれた茨の冠をかぶせられて、十字架の上で亡くなられたのでした。

ピラトの「お前がメシアなのか」との問いには「そうだ」とは言われなかった主イエス、しかしこの主イエスこそ、まさに神の子メシアでした。それは、権力や富の上に君臨する王やユダヤの民衆が待望していた政治的な栄光の王ではなく、罪の支配の中に苦しむ人間を解放するために来られて十字架の苦しみを担われる神の国の王・メシアでした。これは、人間の知恵のはるかに及ばない神の秘められたご計画でした。

I コリント 2 : 8 でパウロは「この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」と言っています。ユダヤの指導者たちはその頑なさゆえに、ピラトは保身のために罪なきを知りつつも主イエスを十字架へ追いやりました。これはまさに神への反逆そのものでした。この時主を尋問することによって逆に「私をだれと言うのか」との主イエスの問いの前に立たされることになったピラト、尋問に対して否定も肯定もされなかった主は、その答えを彼の(人間の)責任ある判断に委ねられたのです。

四つの福音書に共通している今日の聖書は、私たちにとって大変重要な意味を持っています。それは、私たちもまた「どのような王に従おうとしているか」を問われているということです。主イエスの死に対する最終的な責任はだれにあるのか。ヨーロッパの歴史や小説で言われていたように、少し前までローマ・カトリック教会では、それはユダヤ人にあるとして来ました。しかし今日の聖書は、支配者・民衆・ユダヤ人・異邦人のすべての者が例外なしに、神から遣わされたこの王を拒んだことを明らかにしています。私たちもあの時、あの場にいたら同じことをしていたに違いないのです。ですから私たちは、主イエスの受難の記事を通して、自分自身が主イエスの死に対して弁解の余地すらない罪人であることを認めなければなりません。と同時に、そのような私たちのためにも主は十字架の道を歩まれた、そのことを考えて行かなければならないと思うのです。

(説教要約 羽入田悦子)